



Interview 1

垂水中央病院が向かう先

キーワードは「地域完結」と「地域密着」



◎竹中俊宏医師
垂水中央病院
院長・B型

今年4月から垂水中央病院の院長に就任された竹中俊宏医師にお聞きしました。

医療の現状を知る

現在の日本の医療においては、少子高齢化を背景に「地域医療をどのようを守るか」が大きな課題となっています。2025年問題（※1）は、特に首都圏などの大都市圏で大きな問題になっていて、例えば、垂水市の場合、2025年に予想されている人口構成はすでに過ぎており、2045年くらいのところにあると言われて

慢性期（※5）に分け、高度急性期を担う病院を、地域の中核的な都市にまとめ、人とモノを集中させることで、医療資源を効率的に活用しようというものです。しかし、地方の病院からすると、診察の結果、専門的な治療が必要な患者さんを中核病院に紹介して入院や通院をしてもらうことは、患者の皆様に負担を強いるため、実際困難なことです。

全国的な医師不足

また、医師不足も深刻な問題を抱えています。研修医が出身大学の医局だけでなく、自由に研修先を選べる、新臨床研修制度が始まって十数年になります

また、医師不足も深刻な問題を抱えています。研修医が出身大学の医局だけでなく、自由に研修先を選べる、新臨床研修制度が始まって十数年になります

【用語解説】 ※1 2025年問題／2025年には団塊の世代が75歳（後期高齢者）を迎え、超高齢化社会となり、社会保障費の急増が懸念される問題。 ※2 高度急性期／急性期（病態が不安定な状態）の患者に対し、状態の早期安定化に向けて、診療密度が特に高い医療を提供する機能。 ※3 急性期／急性期の患者に対し、状態の早期安定化に向けて、医療を提供する機能。 ※4 回復期／急性期を経過した患者へ在宅復帰に向けた医療やリハビリテーションを提供する機能。 ※5 慢性期／長期にわたり療養が必要な患者を入院させる機能。

民の皆様が安心して垂水市に住み続けることができるのかと思っています。

また、尾脇市長が、鹿児島大学病院心臓血管・高血圧内科学の大石充教授に垂水市スーパーバイザー【写真4】を委嘱され、健康長寿を目的とした垂水研究を行うことは、大きな意味があると思います。まずは、垂水市に住む高齢者の健康状態の現状把握をすることから始まりますが、それに治療介入（リハビリや食事など）を展開することで、健康状態の変化が見えてくれば、市民の皆様

目指すべき医療は

地域で完結できる医療

でもよく、地方の若い医師が首都圏などの大都市圏に出て行くため、県内の医師不足にもつながっています【写真1】。鹿児島県では県内の指定された病院で一定期間勤務することを条件とした奨学金制度などを設けることなどで、医師不足は以前よりは改善傾向にありますが、十分な人数を補えるものではありません。垂水市においても、内科の医師を維持するだけでも精一杯の状況であり、現在当院にはない、産科・小児科の医師を確保し、体制を整えるのは非常に困難な状況にあります。

地域医療は限られた医療資源で行っていかねばなりません。垂水徳洲会病院の閉院で、垂水市で急性期の患者さんが入院できるのは、この垂水中央病院だけであり、地域中核的機能を残していかなければなりません。そこで、我々が目指している姿は、人材資源と医療設備の確保に努め、ある程度の病気であれば、自分たちの病院で完結できる医療を維持することです

目指すべき医療は 地域に密着した医療

【写真2】。そうすることで、市

もう一つは、地域に密着した医療、すなわち在宅医療を中心とした地域包括的医療を更に進めていくことです。そのひとつとして、4月1日にオープンした「垂水市地域包括ケアセンター」【写真3】との連携が大切で、垂水市に住む高齢者の方々



1 垂水中央病院における臨床研修の様子
2 平成28年度に更新したCT
3 平成29年4月1日にオープンした垂水市地域包括ケアセンター
4 鹿児島大学病院の大石充教授に垂水市スーパーバイザーを委嘱

もたらししてくれると思います。垂水市の取組は、これから日本中が2025年に向かって、必ず直面する問題であり、垂水市が先進的に行っている事例がどの地域でも有効なものであれば、日本中の医療に役立つものになると思います。